こどもの感性と創造性を育む
五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発

代 表 者： 鈴木光男（国際教育学部）
協力者・連携機関：
坂田芳乃（アルテ・プラーサ代表）
住　麻紀（アルテ・プラーサ　アーティスト）
松井晃子（アルテ・プラーサ　アーティスト）
木村由美子（三島市文化振興課 主幹）
渡部碧唯（清水町社会教育推進係 主事）
藤田雅也（静岡県立大学短期大学部　教授）
島口直弥（浜松市美術館 指導主事）
筧　有子（浜松学院大学　准教授）
渡川智子（ヴァンジ彫刻庭園美術館　学芸員）
楡木令子（Elm Art Planning　主宰）
青木明子（こどもアートスタジオプロジェクト　主宰）

【経緯】

近年、発達に課題や障がいを抱えるこどもたちが増加している。そのようなこどもたちの多くが感覚統合の課題を抱えてもいる。また、学習障害・発達障害といった問題を抱えてはいないこどもたちでも、五感を通した感性や感覚の衰えは各種の報告でも明らかにされている。こうした状況にあり、アーティストとこどもたちを出会わせ、心震わせられるような活動を展開したり、まちづくりとしても意義ある企画や事業を学生を巻き込んで地域住民や地元の特別支援学校の児童・生徒、あるいは高校生などといっしょに展開したりすることで、昨年度までの取り組み以上の広がりある展開を拡充・発展させていきたい。

【事業概要】

2021年度からアルテ・プラーサ（協力団体）主催の「感覚を活かしたこどもの表現活動としてのアートプログラム」を協力者とともに開発する研究会を開催し、事例を基にアートプログラムの開発とモデル事業を実施してきた。昨年度は本地域連携事業費の助成を受けて、活動・研究の輪を広げながら進めてきた。2023年度は、ここまでに得られた知見をもとに、学生も参画し、さらに近隣の地域や学校に根差した様々な美的経験を軸とした企画や事業を展開するようにした。

【期待される効果・成果】

普段はあまり接することのないアーティストと関わり、非日常的な活動や企画を提案されることで、こどもたちの感性や創造性は大きく揺さぶられる。そのような活動を共にする学生や地域住民にも大きな影響を与えるものであろう。それは昨今話題となっているコミュニティデザインや地域起こし、まちづくりにもつながるものである。また、外部の団体やアーティストと共に活動することで、協働・参画する学生たちの意識が保育者・支援者・教育者として転換していくことも期待できる。

【目的】

これからの変化の大きな時代を生きるこどもには、「何かを生み出したり表現したりする、新しいものを創りだす創造性」が強く求められる。しかし、生成AIの登場にも象徴されるように間接的な体験が増え、直接感覚を刺激する機会は減少している。

こうした中、次代を担うこどもたちに、アーティストと出会わせ、感性と創造性を育む環境・機会を提供し、体験を通じて表現し対話することにより、様々な見方があることを知ると同時に自由で独創的な発想を育み、将来の多様な世界への視野を広げられるよう、未来の人づくりを応援しようとするものである。

【実施内容】

1. アルテ・プラーサの活動（右下写真はチラシ）

「アート寺子屋～みて、きいて、さわって、つくっちゃおう～」きく・さわるアート編

日時：2023年7月30日(日)
会場：三島市生涯学習センター
　　多目的ホール
日時：2023年10月7日（土）
会場：市之瀬ヴィレッジ
講師：楡木令子（美術家）

本活動では企画の段階で関わるのみで、当日は協力者が一般参加者に交じって親子で参加した。

2. 学生や地域との協働・連携

①県立浜松みをつくし特別支援学校シャッターアート事業

シャッターアートプロジェクト委員会が設立され、毎月第4金曜日に委員会が開催された。この委員会には、管理職（渉外・書類申請・連絡調整）、図書芸術課（制作活動・児童生徒の教育活動計画）、小中高各学部（学習集団の割り振り、指導）、総務課（保護者作業の協力依頼）、地域連携課（交流及び共同学習における活動相談）が属し、本地域連携事業の代表者、協力者も折に触れて関わり、このシャッターアート事業は概ね以下のような流れで進められていった。

◆準備期（4～5月）※洗浄と製作計画

・必要用具の購入※聖隷クリストファー大学地域連携事業費より支出
・製作方法の打合せ・協力団体へ依頼
・製作エリアの割振り・体育館南扉を３分割して各部で担当→地域に関わるデザイン
・倉庫シャッター→校章デザイン（高等部美術部員が担当）

◆製作期（6～10月）※背景下書→背景色塗→デザイン下書→本塗

・製作方法…壁面洗浄・やすりがけ（児童生徒と教職員）
・下描き（住民ボランティア・児童生徒、教職員の代表）→背景ペイント→部分ペイント

◆発表期（11月はまみゆめウィーク）

・「はまみゆめウィーク」（学習発表会）にて完成披露・発表

本事業は、児童生徒の創造性や表現力を育むこと、地域との交流を深めることを目的として実施された。開校間もない特別支援学校にとっては、地域に根差し、地域住民に知ってもらうこと・関心を寄せていただくことが何より大切なことであったからだ。シャッターアート制作には、保護者や地域住民も参加した。完成後、保護者や地域住民から「学校が明るくなった」「地域が元気になった」などの声が寄せられた（次頁写真1.2.3.4）。

写真1（左上）みかん
写真2（右上）天竜浜名湖線
写真3（左下）姫様道中
写真4（右下）校章

②静岡県磐田市中泉地区ビタミンロードシャッターアートプロジェクト

磐田駅の西に位置するビタミンロードのシャッターアート事業は、2021年IW高校グループ「アイカツ」が提案した『人が集まる磐田をつくります!～自慢したくなるまち～』がもとになっている。かつてはにぎわいを見せていた商店街だったのだが、近年はシャッター商店街となっている。そこで、高校生の「シャッターアート事業を展開しシャッター商店街の活性化を目指そう！」という提案のもと、同じ思いを持つアーティストと市内3校の高校美術部とで共同して本事業を進めるように体制を整えた。実際の作業には地域住民（中泉地区地域づくり協議会メンバー、自治会役員）と本学学生が関わり、シャッターアート制作が進められた（写真5～10）。

また、2023年度末の3月にはここまで高校生と関わってきた鈴木海斗氏（GOLDEN JUNK代表アーティスト・東京ヴィジュアルアート専門学校非常勤講師）によるシャッターアートが進められ、本学学生も作業に加わり4月上旬に完成させた（写真11・12）。

左の図1は、ビタミンロードシャッターアート事業を通して浮き彫りとなった課題をもとに、対話・共有・交流を位置づけたものである。地域づくり協議会と制作担当する高校生、そして関係する自治会役員・住民間で、シャッターアートの目的や意義について対話を重ね、共有し、展開過程で高校生とシャッター提供者など住民が交流することをイメージした。この事業の中心になって動くアーティストの存在は大きく、今後さらにアートを中核とした地域活性化を推進する際のポイントとなるものと言えるだろう。

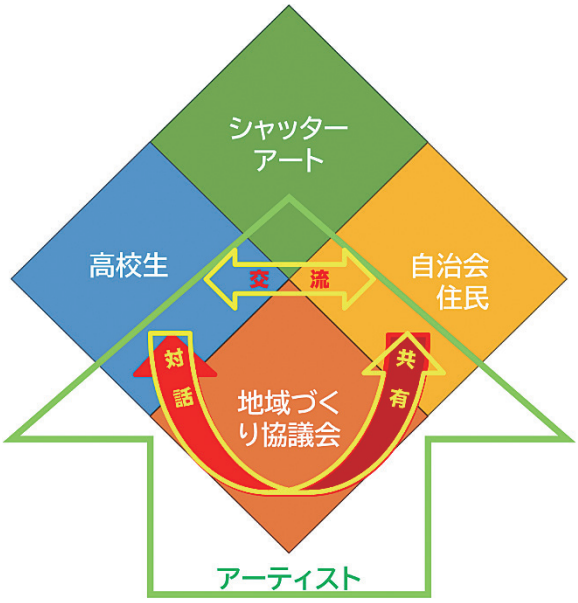

図1 対話・共有・交流を位置づけた事業イメージ

写真5　2023年4月IA高制作

写真6　2023年4月IA高制作

写真7　2023年7月IE高制作

写真8　2023年4月IW高制作

写真9　住民による錆取り

写真10　IE高制作風景

写真11　本学学生の参加

写真12　アーティスト鈴木海斗氏の作品

3. 美術館等との連携・協働

静岡県長泉町にあるヴァンジ彫刻庭園美術館（現在は閉館。静岡県の文化拠点施設として再開準備中）の元副館長 岡野晃子氏が監督・制作した映画『手でふれてみる世界』は、イタリアにあるオメロ触覚美術館を紹介する映画である。この美術館は、見えない人も見える人もすべての人が訪れ作品鑑賞できる美術館である。まさにイタリアのインクルーシブとダイバーシティに裏付けられた美術館と言える。

この映画の上映会と監督の岡野晃子氏のトークショーなど、以下の日程で開催した。

『手でふれてみる世界』上映会
・日時：2024年2月25日(日)13:00～16:00
・場所：磐田市「ひと・ほんの庭にこっと」
・日程：13:00～14:00　映画『手でふれてみる世界』の上映
　　14:15～15:15　監督・岡野晃子氏トークショー（鈴木光男との対談）
　　15:30～16:00　触覚・触感を楽しむワークショップ＆交流会

最後のプログラム「触覚・触感を楽しむワークショップ」は、本事業の協力者の一人で石彫作家でもある藤田雅也氏（静岡県立大学短期大学部　教授）と、上述のシャッターアート事業にご協力いただいた鈴木海斗氏、それから磐田市在住の陶芸家 川合絢也氏（むみょう焼き）の3人の作家それぞれの作品を触って鑑賞するワークショップであった。参加者全員がアイマスクで視覚を閉ざした中で鑑賞するワークショップは、刺激と学びに満ちた企画となった。

また、協力者の筧有子氏（浜松学院大学　准教授）・島口直弥氏（浜松市美術館 指導主事）にも当日の運営や事後の振り返りなどご協力いただいた。

写真13　『手でふれてみる世界』上映会チラシ

以下は、①上映会・②トークショー・③ワークショップそれぞれに寄せられた感想の一部である。

①上映会

いつも使わない感覚を意識することが出来た。
普段いかに触覚を活かしていないかが分かった。また、こういう美術館に視覚障害の方と遊びに行ったら、彼らの感じ方から学ぶことが多そう。たくさんトークしながら鑑賞を楽しみたい。
監督さんの想いが伝わる内容だった。視覚障害の人が楽しめる美術館は、実は全ての人が感性を研ぎ澄まされる場所であるということがよく分かった。
副音声と字幕全てがついた状態の映画を初めて見た。たまに目を閉じて鑑賞もした。様々な人々に楽しまれるものであり、同時に考えさせられる作品でもあった。
「触る」のではなく、「愛でる」という言葉が印象に残っている。
手で触れて見ることができる美術館があるということを知らなかったため勉強になった。インクルーシブ教育に興味があるので、触察絵本などについてもっと知ってみたい。
作品に触れられる美術館があることに、まず驚いた！1つ2つではなく、すべての作品に触れられること。いつか、あの美術館に行ってみたい！触れてみたい！
自分の中での概念が変わる事を知れた。
今まで知らなかった美しい世界に出会えた。

②トークショー

貴重なお話が聞けて、今後に活かせそうだった。
静岡だけではない、全国的にも重要な問題提起を共有できました。
美術から視覚障害、インクルーシブ教育や国との違い等、様々な事を考えさせられた。映画を作成するにあたった背景も聞けて良かった。
触ることの意味は、その作品を作った人の思いに触れることだと思った。作品に込めたその人のあたたかい想いと、触れて初めて感じるぬくもりを「触る」という行為は教えてくれると思った。
美術と教育を絡めて話が聞けたのがとても良かった。美術にはあまり関心がなかったが、他の美術館などについてももっと知りたいと思った。
インクルーシブ教育の根幹に触れ、学びになった。
世界と日本とでの取り組み方の違いなど興味深かった。
幼児教育の大切さ、ふれることの大切さを教えていただき、初心にかえることができた！ふれあう時間が少なくなっている今だからこそ、ふれあう大切さを伝えていきたい。再出発の後押しをしていただいた感覚。きっかけをいただきありがとうございます。

③ワークショップ

体験型で新しい発見があった！
アイマスク状態で触れることで、物の本質を捉えるという学びがあった。
担当して下さった作家・先生の熱い語りがとても楽しかった。
実際にやってみると、見る行動と違う情報が体験出来て、より鑑賞が深まった体感があった。
暗闇の意味を感じられたこと、思っていたよりも視覚に頼っていることが大きいと再認識できた。
見ると気づくことができない、触ることで発見できることの多さに驚くばかりだった。
見えない怖さを知ったとともに、手の感触から情報を得ようと感覚が研ぎ澄まされている感じがした。普段、多くの場面で視覚に頼りながら生活していたのだと気付かされた。触ることで、その作品を作った人のあたたかさに触れられたような気がした。実際、あたたかかった。

写真14（上）アイマスクを着けての移動
写真15（中）石彫作品触察
写真16（右）シリコン作品触察

【成果と課題】

本事業のテーマ「こどもの感性と創造性を育む五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発」として、今年度は特別支援学校や商店街とアーティストをつなげるシャッターアート事業や、美術館とこども・学生・地域住民と関わる上映会・触察ワークショップを展開した。それぞれの事業で美しさと楽しさ、共感を軸に据えた人々の交流を創出することができた。

今回の一つ一つのアートプログラムの試みをもとにして、2024年度は新たに地元の中学生と商店街・地域づくり協議会が協働するシャッターアートを計画している。また、スクールミュージアムとして、小学校内に美術館を期間限定で設置し、その場でアーティストとの交流をはかる事業も予定されている。本学の地域連携事業費により、こうして県内の（一部県外の美術関係者）とも連携・協働して少しずつ事業が拡充発展できていることをありがたく思う。なお、ここでのシャッターアートに関する事業は、「こどもの感性と創造性を育む五感を通した美的経験によるアートプログラム開発Ⅱ－特別支援学校と磐田市でのシャッターアート事業報告－」（『聖隷国際教育研究』第1号、聖隷国際教育学会、2023年3月31日発刊）にて報告したものである。

最後に、活動の場と資料を提供くださった静岡県立浜松みをつくし特別支援学校と磐田市中泉地区地域づくり協議会の関係者のみなさま、各高校の美術部のみなさま、鈴木海斗氏、岡野晃子氏など各事業に関わってくださったみなさまに心より感謝申し上げます。ありがとうございました。